

東京双松会会報

発行 東京双松会事務局 (中央印刷事務器株式会社内)
 TEL:03-3265-4858 FAX:03-3265-4859 URL:http://www.tokyo-soshokai.org/
 印刷 中央印刷事務器株式会社 本社:☎102-0084 東京都千代田区二番町11-3

英国のEU離脱と「中中米」問題

会長 芦田 昭充(第13期 昭和37年卒)

去る6月24日～26日に日本陸上競技選手権大会が名古屋の瑞穂スタジアムで行われ、私は日本陸上競技連盟の役員として観戦致しました。女子800mで驚天動地のことが起きました。松江北高校の福田翔子選手が大学生、実業団の猛者アスリートを抑えチャンピオンの栄冠を獲得しました。しかも自己記録を2秒以上縮める快挙でした。残り250mでラストスパートをかけ、2位に5m程の差をつけ、圧勝ともいえるものでした。私は感動のあまり、しばらくの間、言葉も出ませんでした。また、女子400mでは、松江商業高校出身の青木選手が優勝しました。二人の松江がらみの選手が大活躍し注目を集めました。鳥根県の人口は70万人となっていますが、女子アスリートの活躍の如く多分色々な分野で鳥根県輩出の人材が頑張っているらっしゃると思います。石見銀山の世界遺産の認定、出雲大社遷宮と慶事が続き今や鳥根は注目されています。

さて、今年の初めに世界の政治経済に大きな影響を与える要素はなんだろうと考えました。結論はそれぞれのファクターの頭文字を取って「中中米」と名付けました。

最初の「中」は中国経済です。昨年はGDP6.9%と、かつての高度経済成長からついに中成長に移行しつつあります。しかし、よく見るとこの数字には大きな問題が含まれております。一つは貿易収支の改善が2%も寄与していることです。もちろん、貿易収支の改善は、それはそれで悪いことではありませんが、貿易収支が大幅に伸びた理由を考えると素直に評価する気にはなれません。それは輸出が4%減少したのに対し、輸入が14%も減少したこと起因するからです。

そもそも、輸入の大幅な減少というのは内需の弱さを示しているからです。また、今年の輸出は前年度より更に低下するという事も考えられますので、昨年の大幅な貿易収支の改善は一時的なもので、今年も引き続き改善すると見ることは難しいと判断されます。また、もう一つの大きな問題は昨年のGDP6.9%は実質ベースであり、名目成長は6.4%しかなかったということです。すなわち、GDPデフレーターは-0.5%となっていました。過去数年間、日本が経験したような名実逆転現象が中国にも既に起きていたのです。一方、消費者物価指数は+1.4%でありこの大きな乖離がなんとも腑に落ちません。

次の「中」は中東です。石油価格の下落により中東産油国の財政状況が悪化しておりますが、もっと大きな懸念としてはISISの問題です。このイスラム原理主義運動がついにバングラデッシュ事件で日本人の身にも及んできました。イスラム教徒は世界で16億人、約23%を占めます。大多数の人々は敬虔なイスラム教徒ですが、ごく一部の原理主義者が極端に走っていることが問題です。ISISの勢力のうち外国から参加している人数が相当高い比率を示しております。こ

ういう人が母国に帰り、大きな事件を起こす、あるいは、母国で育った人がISISの影響を受けて母国で大きな事件を起こすという「ホームグロウン」が大きな問題となっております。

バングラデッシュ事件で、日本人はもはや安全ではない、敵対する国であるとみなされていることが明確になりました。しかし、いたずらにイスラム教徒を恐れるのではなく、ごく一部の過激な行動主義者が問題なのだとも認識すべきです。日本政府も身近に迫った大きな危険としてその防止策に取り組むべきだと思います。

次に「米」ですが、これは米国金利上昇問題です。当初、今年は4回程度の利上げがあると見られていましたが、米国経済の状況から見てそこまで行かないだろうという見通しが強まり、円/ドル為替に円高の傾向が出てきました。しかし、「米国問題」は金利上昇問題よりは、「トランプ現象」がより大きなインパクトを持つようになってきました。なぜアメリカ国民がかくも露骨な表現、しかも根拠が極めて薄い論に飛びつくのかということが不思議でなりません。中間白人層がグローバリゼーションの被害を受けているという説明がなされておりますが、寛容と思われていたアメリカ人の性格がかくも露骨なものに変わっていったということに驚きを禁じえません。

そして、先の「中中米」に加えなければいけない四番目の大きな問題は「英国のEU離脱」です。争点の一つである移民問題はある程度わからぬことはありませんが、離脱派の一方の根拠となっているのが2.8兆円のEUへの拠出金という問題です。離脱すれば、2.8兆円がそのまま節約できるという誤った主張がなされていましたが、実は英国はEUから約2.3兆円の補助金をもらっております。したがって、セーブできるのは5千億円です。しかも英国はEU加盟により、この金額をはるかに超えるメリットを受けています。

英国でもクオリティペーパーはこういう点を指摘したと思いますが、一般のイギリス国民はクオリティペーパーをあまり読みません。また、テレビ等もこういう問題を取り上げたとも思えません。こういう状況の下で国民投票という直接民主主義の方法は大きなリスクを伴うということを教えてくれました。下院議員の7割超が残留というように考えているとき、詳しい情報に接しない一般国民を相手にした国民投票というのは極めて危険と感ぜざるを得ません。

その結果、直接影響はあまり受けなかったと思われていた日本経済に最も大きな影響が及ぶことになりました。株価は大きく下がり円高が進みました。いずれ冷静さが取り戻されれば行き過ぎた過剰反応は是正されるとは思いますが……。どう



もこの10数年を見てみますと、世界経済に大きな変動が来ますと日本が一番影響を被るというパターンになっております。この原因は「キャリア取引」にあると思われます。

日本はこの18年間、デフレの為低金利政策をとってきました。日本及び海外の投資家はこの安い金利の円を借りて、外貨に換え、海外投資をしています。しかし、大きな経済的問題が起きますと、外貨運用、投資を中断し、より安全と見なされている円に戻します。この時に円買いが付随し、結果として円高となっております。リーマンショックの時、東日本大震災の時、ともに日本経済は大きなダメージを受けているのに加えさらに円高、輸出減という二重の苦を背おうことになりました。

この解決策としては、低金利をもたらししているデフレ経済というものを治すしかありません。デフレ下では物価が下が

り、一見良いことのように思われますが「経済の縮小」ですから収入も減り、家計にも大きな悪影響を及ぼすこととなります。加えて先に述べた低金利を背景とした「キャリア取引」の逆転が生じた時のインパクトも認識しておく必要があります。アベノミクスがめざしているデフレからの脱却というものは、大変難しいですが、それをやらねば次にまた大きな経済的な大問題が生じたときにまた「弱り目に祟り目」という状況になりかねません。

今回もまた経済談義になり申し訳ございません。日本に大きな影響を与える世界の動きを冷静に分析し、一方で日本が直面している様々な問題に積極的、果敢に取り組んでこそ子孫そして郷土にチャレンジングなチャンスがもたらされると思います。
(株式会社 商船三井 相談役)

平成27年度総会報告

平成27年10月17日(土)、記念すべき第60回総会および懇親会が母校、双松会、近畿双松会からの来賓を迎え、例年通りアルカディア市ヶ谷(私学会館)で盛大に開催されました。

本田久子さん(S60年卒)の司会で始まった総会では、中村康一事務局長(S40年卒)の開会宣言の後、芦田昭光会長(S37年卒)が登壇され、続いて来賓を代表して母校の泉雄二郎校長(S50年卒)と金津任紀双松会会長(S40年卒)から挨拶をいただきました。

芦田会長は挨拶の中で、戦後の70年を主に経済面から振り返り、日本の歩みを10年毎に区切って分析した大変興味深い話をされました。泉校長は、創立140周年を迎える北高の現状について、生徒たちが文武両面にわたり活躍している様子や生徒数が減少傾向にある中でこれからも北高の存在感を高めていきたいとの抱負を述べられました。

金津会長は、庄司前会長の後任として27年7月に新たに双松会会長に就任されましたが、北高卒業生としての誇りを胸に母校への感謝、恩返し気持で頑張りたいとの決意を話されました(挨拶の詳しい内容は、当会ホームページをご覧ください)。

次に、中村事務局長の26年度活動報告、前島紀夫会計担当(S38年卒)の会計報告、宮城由美子監事(S53年卒)の監査報告があり、満場一致で承認され、総会は終了しました。

恒例の講演は、嵯峨崎泰子さん(S59年卒)にお願いしました。野崎クリニック副院長、日本医療コーディネーター協会代表理事である嵯峨崎さんは、「命を託す主治医が見つかる!」と題して医療コーディネーターの立場から、医療現場の問題点、患者と医者とのあるべき関係などについて具体例を交えながら話されました(講演の要旨は3頁の講演要旨をご覧ください)。

講演終了後懇親会に移り、石倉義朗当会顧問(S30年卒)の音頭で乾杯したあと、食事を楽しみながらあちこちに懇親の輪が広がりました。途中、司会の本田久子さんが小泉八雲の怪談「耳なし芳一」の一節を持ち前の美声で抑揚豊かに朗読され、懇親会に花を添えました。

最後に、大岩篤朗さん(S42年卒)のリードで「赤山健児の歌」「山脈浮かびて」を大合唱し、原靖雄副会長(S33年卒)の閉会の挨拶でお開きになりました。

(文責・田中稔=S40年卒)

松江北高創立140周年記念行事

1876年(明治9年)開校の我が母校は、今年140周年を迎えます。これを記念して故郷にて下記の通り記念行事が開催

されます。

●140周年記念 双松会総会

日時:平成28年11月12日(土曜日)14:00~18:00

会場:ホテル一畑

内容:記念式典、記念講演、アトラクション、懇親会(記念講演)寺田直行氏 S48年卒(高24期)

カゴメ株式会社 代表取締役社長
(アトラクション)合唱部、弦楽部、箏曲部など

●招待試合(野球部)

日時:平成28年11月13日(日曜日)9:45~17:00

場所:松江市営球場/ダブルヘッダー

招待校:鳥取県立鳥取西高校

●交流ライブコンサート

日時:平成28年11月13日(日曜日)14:00~17:00

会場:市内ライブハウス(予定)

内容:社会人、教職員、在校生による演奏

●起雲館の開放

日時:平成28年11月12日(土曜日)9:00~13:00

同窓生会館である起雲館は、昭和53年3月赤山移転時(100周年記念)に建て直されました。旧制中学時代からの懐かしい写真、8ミリ、ビデオ等の資料を見ることが出来ます。西川津校舎卒業生は必見です。茶室で茶道部のお点前をどうぞ。

*お問い合わせ先:松江北高等学校 多々納雄二教頭

☎0852-21-4888(代)

報告:双松会幹事長 金平憲(S40年卒)

「東京双松会ゴルフコンペ」への参加者募集中!

東京双松会では会員相互の交流を目的としてゴルフコンペを開催しております。平日開催、週末開催と交互に年2回、毎回和気あいあいと楽しくラウンドしています。

次回ゴルフコンペは、11月頃の週末に開催予定となっております。

初心者の方、ご家族ご同伴も大歓迎ですので、ぜひ皆さまお気軽にご参加ください。それに、現参加者ではとても芦田会長に腕前で立ち向かえる者がおりません。

「我こそは!」という猛者も幹事といたしましては渴望しております…(笑)。

参加希望、お問合せ等は、下記連絡先へご連絡ください。

*お問い合わせ先:tokyososhokai.golf@gmail.com

報告:コンペ幹事 高根護康(S55年卒)

講演

— 嵯峨崎 泰子(第35期 昭和59年卒) —

■■平成27年度総会・講演■■

「命を託す主治医が見つかる！」
～納得の医療を受けるための
医師とのつきあい方～

嵯峨崎さんは学校を卒業してから32年間、医療業界に在籍し、現在は看護師として「コーディネーション」という、医療の現場の隙間を埋める仕事、患者と医師の“意思決定”を支援する仕事に携わってこられました。「コーディネーション」という言葉の本来の意味は、「物事を調整してまとめあげること」で、医者と患者、医療スタッフの間を取り持つ役割を果たしている、ということでしょう。1995年、自身のがん治療をきっかけに医療コーディネーターとしての活動を始められたということです。

医者は「診断、治療、評価を修正し、これに伴う研究や教育を推し進め、書類を作成する」のが仕事です。医療スタッフはこれを補完し、それ以外の仕事を担います。

患者(医療対象者)としての役割は、まず、予防して病気にならないこと。日本の国家予算の3分の1が医療・福祉関連に使われていることを考えると、予算を圧縮する意味でも、病気にならないで生涯を全うし、「ピンピンコロリ」が一番いいのですが、なかなかそうはいかない。

病気を心配したり疑うときは、まず相談(疾患検索/検診)すること。診断して治療を受ける場合には、その病気をしっかり理解し、医者が指示する治療を理解し、協力することだという。「医者とともに治療を行う」という姿勢を持つことが、医療現場では一番難しいことだと、嵯峨崎さんは述懐する。

そして、患者に対して厳しい意見も率直に述べられた。今はインターネットを通じて、病気を簡単に調べられる。だが、患者は病気に関しては素人だということを自覚してほしい。なぜなら、医者は10年かけて独り前になるが、ネットでの検索だと、ある病気に対する情報の格差には余りにも開きがあり、適切に理解するのはなかなか難しいからだという。ネットなどの情報を鵜呑みにしないで、患者が自分自身へどう適応するのかを適切に評価してほしいという。

自分は素人だということを自覚して、医者ときっちり話し合いをしながら、何がわからないのか、どういうふうに生きていきたいのか、価値観は何なのか——などを話し合うようになれば、医者と患者との間にはほとんど問題が生じないという。

お勧めできる医者は、患者の今を見ているのではなく、過去を見たり聞いたりし、そして今を判断し、未来を予測しながら診察を行う方です。そのためには、患者側からの情報提

供が必須で、「こういうことで困っている、こうしていきたい」ということをメモにして書いてもらえれば、なおいい。自分がわかってほしいことを作文でもいいが持参すれば、診療の質が変わります……とのこと。

例えば、ガンといわれ、手術を勧められているが、十分な説明をしてくれないので不安がある。主治医に黙って「セカンド・オピニオン」受けてもいいか——などの質問を受けることがある。不満とか不信ではなく、自分の中に確定できない何かがある——ということで、別の医師の意見を聞くというのはいいことだが、「セカンド・オピニオン」を得るには、絶対、ファースト・オピニオンが必要になる。最初に見立てた医師の診断情報提供書を必ず持ってきてもらい、次の医師にバトンタッチして、そして必ず最初の医師に戻ることが大原則だという。

著書「命を託す主治医が見つかる！」の最後を、嵯峨崎さんは極めて貴重な“提言”で締めくくっている。患者にとって守るべきは、次の3つの「あ」だという。

まず最初は、「焦らないこと」。いまずぐ生命を左右するような緊急時以外は、自分に「落ち着け、冷静に」と言い聞かせること。次に大事なものは「諦めないこと」。「もう治療法はありません」と告げられても、勧められるまま諦めてホスピスや緩和ケアだけに行く必要はありません。自らが治療を望む限り、可能性はあります。3番目は「侮らないこと」。「早期のがんだから」とか、「簡単な治療だから」と言われても、決して医者任せにはしないことだという。

以上、講演の内容を大まかにお伝えしましたが、紹介状のお願いなど医師へ頼みづらいことや言いづらいことの、頼み方・聞き方・伝え方の微妙なニュアンスは、嵯峨崎さんの著書「命を託す主治医が見つかる！」(日本文芸社)をお読みになってはいかがでしょうか。講演の大体の要旨については、東京双松会のホームページにある「命を託す主治医が見つかる」のPDFをご覧ください。(文責・長谷川隆義=S40年卒)



嵯峨崎泰子(さがさきやすこ)プロフィール
医療法人社団ユメイン「野崎クリニック」副院長/看護師。
日本医療コーディネーター協会代表理事。これまでのコーディネーション件数は数千件を超え、患者が望む医療の実現のため、医療側との橋渡し役として、日々活躍されている。著書は他に「生命と医療にかける橋」(生活ジャーナル)、『あなたのがん治療 本当に大丈夫?』(共著・三省堂)などがある。

ふるさと巡り IN 東京

カリスマ編集長の原点=校友会雑誌

「頑固だが、依怙地ではない」この男は、そのいかつい風貌から「鬼瓦」と呼ばれ、池島信平・文藝春秋編集長からは「銀座のゴジラ」と親しまれた。NHK連続テレビ小説『とと姉ちゃん』で、唐沢寿明演じる花山伊佐次こと、「暮しの手帖」の初代編集長・花森安治のことである。彼は神戸三中から受験科目に数学のない旧制松高(十期、文甲=英語専攻)に受かり、『校友会雑誌』の編集長を務め、のちに「新聞記者か編集者になるんや」という“夢”をかなえた。パンカラ松高生が、編集に目覚めたのである。そのうえ、美人で快活な山内ももよ(松江一の呉服問屋の末娘)との大恋愛の末、旧制松高の恩師の仲立ちで、学生結婚している。

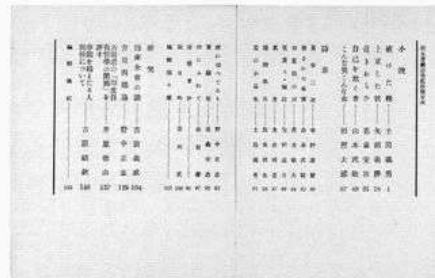
女性週刊誌の“敏腕編集長”は「クラテはすごいな。君らもあれに学べ。しかし真似しても適わんぞ」とよく話したというが、そのクラテとは「暮しの手帖」のこと。花森安治は、今でいう“カリスマ編集長”だった。世に名編集長はいても、自ら誌面をレイアウトし、表紙画や挿絵、レタリング(書き文字)までも手がけてしまう編集長は、花森くらいだろう。とにかく多才で、とことん独裁。広告はいっさい入れず、編集部員は原稿は真っ赤っかにした。広告に依存しない雑誌ゆえに徹底した商品テストは、メーカーを震撼させ、後年、部数は百万部に達した。

そういった雑誌づくりの原点となったのが、旧制松高の『校友会雑誌』だ。旧制高校には「校友会」という組織があり、年に2~3回、雑誌を発行していた。1932年、会誌20号の編集委員に選ばれ、その半年後、実際に発行された校友会誌の編集後記を、花森は気迫のこもった書き出しで始めている。

《本号の責任はすべて僕にある。この編輯は全く僕によって、その独断のもとになされた故に——この点、委員田所、保谷の厚意に感謝したいと思ふ。》

この20号だけは、A5判と違い、やや小振りな正

方形の洒落たフランス装で、余白はたっぷり取ってある。評判は上々で、親友の杉山平一(詩人・映画批評家)によれば《当時、彼の作った校友会雑誌のデザインの斬新



旧制松高校友会雑誌20号の目次
(島根大学図書館所蔵)

は、今も語り伝えられるが、その小説、詩、前衛絵画、独特の字体は私を魅了した》(「私のあった人」という。

編集後記に名を連ねた田所太郎は旧制松高から東京帝大に進み、『帝國大学新聞』編集部に入り、1年遅れて花森と再会する。その後、日本読書新聞編集長になり、編集部員として在籍したのが、大橋鎮子(のちの暮しの手帖社社長)だった。敗戦の年の11月、日本読書新聞が復刊、その田所のもとで編集部出入りの“カット屋”を引き受けたのが、花森だった。この復刊直後、田所編集長は大橋から出版社立ち上げの相談を受け、「それだったら、いま編集部に見えている花森安治さんは、その方面に力のある人だから相談したらいい」と薦め、大橋はその日のうちに自分のプランを打ち明けた。

こうして大橋の「女の人を幸せにしたい」という志と、花森の「今度の戦争に、女の方は責任がない。それなのにひどい目にあった。僕には責任がある。女の人がしあわせで、みんなにあったかい家庭があれば、戦争は起こらなかつたと思う。守るに足る暮らしを作っていかなければ」という思いが一致して、ここに大森社長、花森編集長の二人三脚で「暮しの手帖」が作り上げられていくことになる。

(文責・長谷川隆義、文中敬称略)

「美しい暮しの手帖」第一号表紙

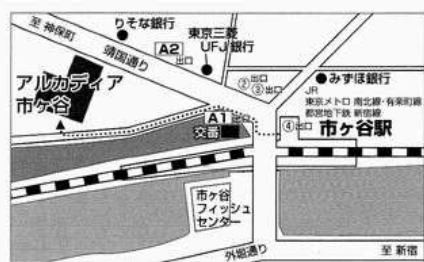


—平成28年度 第61回東京双松会開催のご案内—

1. 日 時 / 平成28年10月15日(土)12:00~16:00
2. 会 場 / アルカディア市ヶ谷(私学会館)
東京都千代田区九段北4-2-25
TEL: 03-3261-9921 (代表)
3. 参加費 / 8,000円(学生無料)
4. 申込〆切 / 平成28年10月3日(月)

■■講演*近くて遠い国——中国で12年暮らして■■

★講演者*森田 六朗(もりた ろくろう) S38年卒・14期、東京中央日本語学院*中国に日本語講師として滞在された体験を通し、中国の風土、習慣、文化、日本人との違い等々、興味深いテーマを本音で語って頂きます。帰国後、現在も引き続き日本在住の外国人に日本語を教えることを通して、国際交流に貢献されています。



編集後記

旧制松高に関しては、花森装丁の『旧制松高物語』(朝日新聞社松江支局編・今井書店刊)に詳しいが、この稿には間に合わなかった。他に『花森安治伝~日本の暮らしを変えた男』(津野海太郎著・新潮文庫)などを参考にした。目次の写真は松江在住の金平憲氏の手配による。
長谷川隆義